アフリカ講座

東アフリカの前期旧石器文化

加藤 安 信*

The Lower Palaeolithic Cultures of East Africa

Yasunobu Kato

はじめに

石器時代はアフリカ史のなかでも、99.9%近くを占めている。コービ・フォーラ Koobi Fora 遺跡やオルドヴァイ Olduvai 遺跡の調査で発見された最古の石器群から、晩氷期まで続いた細石器 Microlith を中心とする石器群まで、200万年あるいはそれ以上ともいわれる時間が経過している。木製の道具や骨角器が遺存しなかったこともあるが、土器製作が行われ、金属器が用いられるようになってからも石器製作は部分的に続けられたのであり、石器はこの間の長期にわたる採集と狩猟を中心とした生活の中で、最も主要な道具であり続けてきた。

アフリカにおける旧石器時代文化の研究については、1920年代からのダート R. A. Dart やリエト・ローウェ C. van Riet Lowe らによる南アフリカでのアウストラロピテクスを中心とした人類化石調査、1930年代以降のリーキー L. S. B. Leakey 一家等による東アフリカ一帯での調査、そしてさらには、同年代におけるヴォーフレー R. Vaufrey やケートン・トンプソン G. Caton Thompson らによる北アフリカやナイル河谷での調査など、各地域で個別に進められてきた研究が、やがて1947年にナイロビで開催された第1回の汎アフリカ先史学・第四紀研究会議 Pan-African Congress on Prehistory and the Study of the Quaternary

及びそれ以降の同研究会議を通じて、相互の関連性に検討が加えられ、アフリカ大陸全域にわたる石器文化の発展過程が明らかにされてきたという経緯をもつ。

対象範囲が広域であることもあって、こんにちでも、石器文化を理解するうえで基礎となる緻密で確固たる編年確立が困難な状況にあるが、一方で最近では、リーキー R. Leakey らを中心として、初期人類の家族や集団生活、社会の構造、行動様式、食料の獲得と分配、人間と環境とのかわり、交流と移動などの問題についても分析が加えられてつつある。

本論では、旧石器文化理解の基本となる石器製作における技術と石器形態の変化という観点から、東アフリカ前期旧石器文化の展開を概観してみたい。

1. 時代区分と編年をめぐる問題

アフリカ大陸における石器時代区分は、第1回の汎アフリカ先史学・第四紀研究会議以降、サハラを挟んで、北アフリカと西・東・南アフリカとで異なる時代区分・編年観が用いられてきた。北アフリカやナイル河谷流域では、北中海に面し西アジアにも直接通じていることもあって、ユーラシア大陸と同じように、旧石器時代 Palaeolithic (前期・中期・後期) → 中石器時代 Mesolithic → 新石器時代 Neolithic という時代区分が用いられているのに対して、サハラ以南のアフリカでは、

* 愛知県埋蔵文化財調査センター

表 1 アフリカ石器時代編年表 (J. D. Clark, 1970 による)

表2 東アフリカ石器時代編年表 (J. E. G Sutton, 1981 による)

	時代区分	石器の特徴	主な文化段階	ヨーロッパ・地中海地域	地質年代
3,000,000年	前期 石器時代	第1期 打器, 剥片	オールドヴァイ文化 (ツールインダストリー)	前期旧石器時代	下部更新世
1,000,000		第2期 両面加工石器 (ハンド アックス, クリーバーなど)	アシュール文化 (両面加工石器インダストリー)		中部更新世
100,000	中期 石器時代	第1期 調整石核による剥片石器	サンコ文化	中期旧石器時代	上部更新世
40,000		第2期 着柄 小形で洗練された石器	ルベンバ文化 河岸・森林地帯 高原・サバンナ地帯		
15,000	後期石器時代	石刃, 細石器 組み合わせ式石器	チトロ文化 ケニア・カブサ文化 "石製鉢" 諸文化 (移行期)	ファウア スミス文化 スティールベ イ文化 (マゴシ文化) ウィルトン文化	沖積世
				後期旧石器時代 続旧石器時代又は 中石器時代 新石器時代 (地域 によって異なる)	

前期石器時代 Early Stone Age (ESA) → 中期石器時代 Middle Stone Age (MSA) → 後期石器時代 Late Stone Age (LSA) → 新石器時代という図式が採用され, それぞれの移行期に第1・第2の中間期が設定されている。これは, 石器文化の展開がユーラシア大陸とは異なった様相をもつという認識に基づいて確立されたもので, 現在用いられている最も標準的な見解は表1に示したデスモンド・クラーク J. D. Clark の編年観である

(Clark, 1970)。また, その後, これを補完・修正する地域的な編年試案もいくつか提起されており, かなり類似しているが, ここではサットン J. E. G. Sutton による東アフリカ地域の編年表をもあわせて示しておく (表2; Sutton, 1981)。

これらの考え方によれば, サハラ以南の石器時代文化の展開はおおよそ次のように概括される。前期石器時代は, 石器文化の初源期すなわち 200 万年前ごろから, おおよそ 10 万年前ごろまでを含み, 打器やハンドアックスなどの石核石器を主体とするオールドヴァイ文化 Oldowan とアシュール文化 Acheulian がこれに当る。中期石器時代は, おおよそ 10 万年前から 1 万 5 千年前ごろまでを含

み, 調整石核およびそれから剥取された剥片によって作られた石器を主体としていて, 地域的な多様性が始まった時代を指す。そして, 後期石器時代は, おおよそ 1 万 5 千年前から, 多くの地域で鉄器使用が開始される 2 千年前ぐらいまでを含み, 細石器を主体とする石器文化がこれに該当するとしている。

もちろん, このような年代観は, ^{14}C 年代測定法などによる絶対年代測定値が乏しいために概略的なものであり, 多分に議論の余地を残しているといわざるをえない。なかでもとくに, 前期石器時代と中期石器時代との間におかれた第1中間期 First Intermediate, 中期石器時代と後期石器時代との間に設定された第2中間期 Second Intermediate という移行期については, 本来設定概念が曖昧であり, 石器製作技術や石器群の詳細が明らかにされてくるにつれて連続的なつながりがたどられるようになってきていて, 最近では設定意味が失われ除外されていく傾向にある (Sutton, 1981)。

また, 系統的な調査の進展によって, 従来の見解とは矛盾する絶対年代測定値もいくつか得られ

てきている。このため、上記の時代区分による分類は、現水準ではあくまでも相対的・暫定的なレベルに留めておくべきであると指摘する意見も提起されている (Van Noten, 1981)。例えば、1959年に J. D. クラークによって、約 7,500 年前とされていた後期石器時代の開始は、1971年にウガンダのムニャマ Munyama 洞窟遺跡のデータから 15,000 年前まで古くなり (Van, Noten, 1971)、さらに 1977年には、ザイールのマトゥピ Matupi 遺跡の細石器文化が、約 40,000 年前と測定される (Van Noten, 1977) など、たび重なる修正を必要としてきた。したがって、ノーテンは広いアフリカ大陸全体にわたって、大きな文化領域を設定していくことは現状では困難で、分類や編年よりも、各地域における先史時代人の生活様式、環境と人間との関係などの問題を適確に把握・分析していく作業が、まず第 1 に必要であると述べている (Van Noten, 1981)。

同じように、フィリップソン D. W. Phillipson は、5 万年前以降の ^{14}C 年代測定値が集積されてきた点をふまえ、とくに後期石器時代以降の新石器時代 → 金属器時代という時代区分の枠組みは、あまりにも巾の広すぎる技術発展レベルをよりどころにしているうえ、その内容にも不明確な部分が多いと批判し、こうした時代区分名称使用に消極的な考えを示している (Phillipson, 1985)。そして、道具製作における基本技術、その地域的な多様性の問題、恒久的集落の形成など、経済的進歩と生活様式の発展に主眼をおき、アフリカ旧石器時代・新石器時代についての叙述を試みている。

さらに、東アフリカ地域の石器時代区分・編年については、第 1 回汎アフリカ先史学・第四紀研究会議において提唱された、4 雨期 2 湿潤期により形成されたとされる河岸・海岸段丘面、湖水面変動、あるいはそれに伴う動・植物相の変化と関連づけて理解されてきたところが強い。しかし、最近では、アフリカ大陸の雨期をヨーロッパ大陸における氷期に対応させて把える考え方は否定されつつある (門村, 1987)。したがって、時代区分及び編年作業は、基本的には石器製作技術や器種構成の変化、およびそれらを使用した集団社会

の発達段階などに基づいて行われることが望ましいと思われる。そこでこの観点からすれば、ごく大ざっぱな石器製作技術の発展過程については、グラハム・クラーク J. G. D. Clark による 5 様式区分があるので (Clark, 1977)、これを基本にして、前・中・後期石器時代という区分は再構成できるものと考えられる。

第 5 様式＝細石器的な組み合わせ道具＝中石器時代

第 4 様式＝パンチ打法によって剥取され、深いリタッチの施された石刃＝後期旧石器時代

第 3 様式＝調整石核から剥取され加工された剥片石器＝中期旧石器時代

第 2 様式＝両面加工されたハンドアックス＝前期旧石器時代

第 1 様式＝打器と剥片＝前期旧石器時代

ヨーロッパで展開した石器製作技術に基づく様式区分を安易にアフリカ大陸全体に適用すべきではないとする批判もあるが、しかし実際には、サハラ以南の地域においても共通する製作技術の発展過程がたどられている。調整石核とそれによる剥片石器はアシュール文化以降、各地で盛行していて第 3 様式に対応させうるし、また、絶対年代への比定には差異が認められるものの、南アフリカのハウイソンズ・プールト文化 Howieson's Poort Industry にみられる石刃は第 4 様式への比定が可能であると考えられる。もちろん、第 1・第 2 様式の石器はアフリカ大陸を起源とするものであるから、様式適用が当然であることはいうまでもない。このようにみえてくると、後期石器時代以降、地域的特殊性・停滞性を帯びたアフリカの石器時代もユーラシア大陸と共通する時代的枠組みの中で理解することができる。したがって、本論においては東アフリカの前期旧石器文化として“旧石器”の用語を用いているのであるが、個々の石器群及び文化の詳細な分析・比定など、残されている問題点も多い。

Ⅱ. 最古の定型化した石器群

シャベイロン J. Chavaillon は、道具成立の系譜を次のように仮定している (Chavaillon, 1976)。第1の段階は、礫をハンマーストーンとして使用する段階で、打撃の過程で必然的に破片が剥がれてくる。第2の段階は、礫をハンマーストーンとして使用し続けるが、加えて、その過程で得られた鋭利な破片をも使用するようになる段階。第3の段階は、剥片 flake を取るために意図的に礫を割り始める段階。したがって、礫は石核 core となり、剥片剥取は作業のはっきりとした目的となっていく。そして石核は打器 chopper や多面体石器 polyhedron のような形態となる。第4段階では、剥片が取り続けられると同時に、石核自体が道具として使用されるようになる。そして、第5段階はオルドヴァイ遺跡やメルカ・コントレ遺跡

にみられるオルドヴァイ文化 Oldowan Industry の段階であるとしている。

単に使用されただけの礫とは区別して、剥がされた石片が石器として認定されるためには、一定の技法によって剥がされていることと、剥がされた石片などに同一の型式が認められることが必要で、上記の第3段階以降は、この意図が明確化していく過程である。現在確認されている最も古い定型化した石器群は、トゥルカナ湖東岸域で発見されている KBS インダストリーをも含めたオルドヴァイ文化である。

Ⅱ-1. シュングラ文化相 Shungura facies の石器群 (図1)

オルドヴァイ文化の石器群については後述する

6～8：石核，1～3，5，12，13：剥片，4，9～11，14～16：破片，17：搬入石

図1 シュングラ文化相石器カタログ (1～8 J. Chavaillon, 1976；9～17 Merrick & Merrick, 1976 による)

が、オモ河がトゥルカナ湖に注いでいくエチオピア南部のデルタ地帯にあるシュングラ累層 Shungura Formation からは、オールドヴァイ文化とは異なったシュングラ文化相と呼ばれる石器群が発見されているので、まずそれを紹介しておこう (Chavaillon, 1976, Merrick & Merrick, 1976, 大参, 1979)。

層厚760mにも及ぶシュングラ累層は、鮮新世—更新世にかけて形成され、K-Ar 年代測定法では、基部で375万年前、頂部で100万年前よりやや新しい年代値が得られている。石器は、層中に分布する火山性凝灰岩を示準にして12層に細分された層位のうちのF層下部から由来したとみられ、同層の上に分布する凝灰岩層の K-Ar 年代値が 193 ± 10 万年前となっているので、F層の堆積年代はおおよそ200万年前ごろと見積られている。

メリックらが204地点遺跡の FtJi 1 地点に開けた $2\text{ m} \times 4\text{ m}$ のトレンチからは、130点の人工遺物とゾウ・カバ・ウシ科動物などの哺乳動物化石骨が発見された (Merrick & Merrick, 1976) が、それらは曲りくねって流れる小河川の河底に二次的に堆積した30cmほどのレンズ状を示す砂礫層から出土したものであった。したがって、本来の居住地はトゥルカナ湖東岸の遺跡群と同じように、もう少し高い河の堤防のような地点に立地していたものと考えられている。一方、396地点遺跡の FtJi 2 地点では、 $2\text{ m} \times 5\text{ m}$ のトレンチから95点の人工遺物を伴った二次堆積とは考えられない粘土層の居住面が検出されている。FtJi 2 地点の石器のほとんどは石英と石英脈岩で作られているが、それらが自然礫を全く含まない粘土層のごく限られた範囲内に集中していることや、F層堆積物の粗い礫層においてさえも石英脈岩の円礫や破片が認められていない点を考えあわせると、石器製作に使われた石英と石英脈岩は居住者によって他の原産地から運び込まれたものと考えることができる。シャベイロンによる発掘調査が行われたオモ Omo 57 遺跡では30点、オモ123遺跡からも900点の人工遺物が出土している (Chavaillon, 1976) が、やはり粘土層中の狭い範囲からであって、初期人類が河川あるいは湖に面した地点に居

住していたことを窺わせている。

シュングラ文化相の石器群を構成する石器は、オールドヴァイ遺跡や KBS 遺跡から出土した石器と比べると著しく小さく、また定型化のレベルも一段低い段階に留まっている。器種構成としては、石核・剥片・碎片・搬入石 manieport の4種があるのみで、二次調整を施した定形石器は今のところ一点も認められてはいない。打器のような大形の石核石器をもたない点はこの文化相の特徴の一つとされ、例えば FtJi 1 地点出土の石器の平均長は、1.6 cm と極めて小さい。また、FtJi 2 地点の居住面における石器集中度が 1 m^2 当り 9.5 点という数字は、オールドヴァイ遺跡の場合よりも低いとはいえ、コービ・フォーラ遺跡の数値に近い点数となっている (Merrick & Merrick, 1976)。

石核は、シュングラ文化相の石器群のうちで最も大形の器種であるが、それでも長さは2~3cm と非常に小さい。量的にも少なく、シャベイロンの調査によってオモ123遺跡から30点発見されたが、これは全遺物の2%に当るにすぎない。石核の形態は二種に細分され、浅くてやや大きめの剥片剥離が両面において求心的に施されている円盤状の石核 (図1-7) と、平坦打面で片面に主要剥離面をもった半球形・立方形・角錐形・五角形を呈するものなどを含めた多面形の石核とがある。これらのうちには、稜に敲打痕を残すものがあり、石核自体が道具として用いられていたことを示す例も含まれている。

剥片は、シュングラ文化相の石器群のうちで主体をなしており、オモ123遺跡では全遺物のうちの34~39%、オモ57遺跡では23~25%を占めている。形態的には巾広剥片と縦長の剥片とに区分でき、オモ123遺跡の場合、前者が66%、後者が31%となっている。また打面形態では、自然礫面を残すものも含めて、平坦打面が77%と圧倒的に多い。法量も小さく1.0~3.0 cm の範囲内のものがほとんどであるが、これは、石核の平均法量が2.0~3.0 cm であった点からすれば、きわめて当然のことといわねばならない。また、少例ではあるが、側縁にギザギザの剥離痕を残すものがあり、これも石核同様、使用痕とされている。

石器製作に用いられた石材としては、最多を占める石英・石英脈岩の他に、少量のメノウや玉髄・チャート・溶岩があるが、とくに石英の場合、小形の定型石器を作り上げるためには、高い技術が必要とする。オモ57・123両遺跡から出土・採集された資料のなかには、二次調整が加えられた定型石器は1点も含まれてはいない。しかし、オモ123遺跡K地点の場合でみると、わずか1m²の調査区から191点の遺物の集中出土があり、しかも18cmの間隔をおいた大形の石刃形石英剥片の接合資料も発見されているので、シルト面におけるヒトの居住は間違いないものと考えられているわけである。

シュングラ文化相の石器群は、打器や多面体石器・削器 scraper などの定型石器をもっていないことや、全てが小形品ばかりである点で、オールドヴァイ遺跡やコービ・フォーラ遺跡の石器群とは確実に異質である。このため、それらを石器に含めうるものかどうかという疑問が残らないわけでもない。しかし、小形剥片と石核自体を道具として使用していた段階、すなわち、シャベイロンのいう第3～第4段階に相当していると考えれば、オールドヴァイ文化に先行する最も古い石器文化であるとしなければならない。そして、小形石器から大形石器を含む石器群へ、円盤状の石核や多面形の石核から円盤形石器 discoid や多面体石器へ、さらには単純剥片から調整の施された削器類へという発展過程を想定してみると、シュングラ文化相の石器群は技術発展段階の上で、未定形石器から定形石器成立への過渡的段階におかれうるように思われる。しかし、現段階では資料が不足していて、その位置付けは今後の課題となっている。

Ⅱ-2. KBS インダストリーの石器群 (図2)

KBS インダストリーは、1967年以降の調査で、鮮新世から更新世にかけての化石人骨が100体以上も発見されてきたトゥルカナ湖東岸域にひろがる石器群である (Isaac, 1976, Isaac & Harris, 1978)。まとまりをもった石器群がKBS遺跡とHAS遺跡から発見されているが、それらは地質的

にはコービ・フォーラ累層 Koobi Fora Formation の下部層 Lower Member に含まれた KBS 凝灰岩層に当たっている。この KBS 凝灰岩層に対しては、K-Ar 年代値で当初260±26万年前という非常に古い年代値が与えられたが、その後、180万年前という修正値が与えられている。

KBS インダストリー石器群の器種構成は、打器・多面体石器・円盤形石器・少量の小形削器類・剥片からなっていて、明らかにシュングラ文化相の石器群よりも定型化が進んでいることを示しているし、また構成器種も豊富となっている。これらの石器は、いずれも小形の円礫を打割して作られており、剥片の中にはブレイド・タイプのものまで含まれている。この他に、使用痕を残す礫、ハンマーストーン、裂片 debitage、石器製作用に持ち込まれたとみられる搬入石などがある。石器の石材は、2～3点のチャート・石英を除き、ほとんどが溶岩となっている。

これらを後述するオールドヴァイ遺跡ベッドI Bed I から出土した石器群と比較してみると、剥片製小形スクレーパーをほとんど含んでいない点、球形石器 Spheroid や亜球形石器 sub-spheroid を全く含んでいない点、さらに石核石器や剥片の平均長がオールドヴァイ遺跡 DK I 地点のものよりもやや小型である点などに相違点をみせている。しかし、打器、多面体石器、円盤形石器の形態が共通していることから、オールドヴァイ文化の範疇に含めうるもので、イサークらはその初期段階に相当するものとみている (Isaac, Harris & Crader, 1976)。

Ⅱ-3. オールドヴァイ文化 Oldowan Industry の石器群 (図3)

オールドヴァイ遺跡を標準遺跡とするオールドヴァイ文化は、当初、打器などの大形石器のみが取り上げられ、打器を主体とする“礫器文化”として理解されてきたが、M. D. リーキーによる詳細な調査報告書が刊行されると、各種の小型石器を含み、豊富で相当進んだ内容の器種構成をもつ石器群であることが明らかとなってきた (Leakey, 1971)。

1 : 打器, 2 : 円盤形石器, 3 : 多面体石器, 4・5 : 剥片, 6 : 再生剥片
(1・2, 4~6 : KBS 遺跡, 3 : HAS 遺跡)

図2 KBS インダストリー石器カタログ (M. D. Leakey, 1970 ; G. Ll. Isaac, 1976 ; Isaac & Harris, 1978 による)

オールドヴァイ遺跡におけるオールドヴァイ文化石器群は、ベッドⅠとベッドⅡ下部に包含されており、DKⅠ地点ほか、FLK地点居住面・同地点1～5層などの地点からかなりまとまった資料が得られている(図3)。石器の多くはやはり円礫を打ちかいて作られており、石核石器には打器・多面体石器・円盤形石器・祖形両面加工石器 Proto-biface, 球形及び垂球形石器, 剥片石器には削器

類, 彫器 burin・ナイフ形をした石器 Knife-like-tool・尖頭器形石器 trimmed point などがある。この他にも、使用痕を残す多数の不定形剥片類の出土がみられる。打器には、刃部が円礫長軸の先端につけられたもの end-chopper と、側縁につけられたもの side-chopper とがあるが、この段階では剥離が全周にまで及ぶことはない。多面体石器と円盤形石器では、剥離面の交叉する複数の稜

1～3・12: 削器類, 4: ナイフ形をした石器, 6: 調整のある尖頭石器, 7: 彫器, 8: 多面体石器, 9・13～15: 打器類, 16: 円盤形石器, 5・10・11: 使用剥片

図3 オルドヴァイ遺跡のオルドヴァイ文化期石器カタログ (M. D. Leakey, 1971 による)

が刃部を構成しており、シャベイロンが指摘するように、第3段階の石核そのものが道具として認識された結果、定型化したものとみてよい。

剥片製削器類には、刃部が先端につけられた搔器 end-scraper, 側縁につけられた削器 side-scraper, 凹んだ刃部をもつ凹刃削器 hollow-scraper などの形態区分がみられるし、また、彫器や尖頭器石器は後期旧石器時代に盛行する器種でもある。DK 1 地点における石器の器種構成比をみると、打器30.4%, 多面体石器20.8%, 円盤形石器17.5%, 球形及び垂球形石器4.5%, 大形削器類6.5%, 小形削器類13.0%, 彫器2.0%, その他5.2%となっていて、大形の石核石器が70%ちかくを占めている。FLK 地点居住面において小形削器類が30%と比較的高い比率となっている場合を例外として、FLK 北地点の各層, HWK 東地点, MNK 人骨出土地点でも打器は器種構成のうちで第1位を占めている。

このように、オルドヴァイ文化の段階には、すでに多種類の形態の石器が製作されており、KBS インダストリーの石器群よりも多様であることは明らかである。これらの石器の使用法を、狩猟や採集生活における具体的場面と結びつけることは容易ではないが、切る・剥ぐ・たたく・割る・つぶす・突く・掘る・穴をあけるといった用途に応じて製作・使用されていたことはまちがいないく、石器形態の多様化は日常生活における個々の活動が意識的に整理され、その機能に応じて形態が分化してきたことを示すものである。

石器製作に用いられた石材には、溶岩や石英・石英脈岩、まれにチャートやナイスなどがあり、打器や多面体石器・円盤形石器などの大形石器には溶岩、削器類などの小形剥片石器には石英や石英脈岩が選択されている場合が多い。ただし、DK 1 地点では、小形石器でも64.5%が溶岩製となっていて、例外的となっている。そして、オルドヴァイ文化期以降、ベッドⅡ中位から上位に移っていくにつれて、石英と石英脈岩が用いられる頻度数はどの地点でも高くなっていき、また、8～10マイルも離れた地点に石器材料を求めていたことも明らかにされている。

オルドヴァイ遺跡ベッドⅠの1B 凝灰岩層は、K-Ar 法によって175±3万年前と測定されている(R. L. Hay, 1976)。したがって、オルドヴァイ文化の始源がこの時代にまで遡ることは確実であろう。同文化の石器群は、定型化の上でも器種構成分化の点でもかなり進んだ内容をもっていて、シュングラ文化相の石器群から KBS インダストリーをも含めたオルドヴァイ文化石器群への発展過程を図式化するには、まだまだヒアタスがあるとしなければならない。該期に属するとされる打器は、南アフリカのマカパン Makapan 遺跡や北アフリカのアイン・ハネシュ Ain Hanech 遺跡、ザイル・シャバ州や中央アフリカ西部でも出土しているとされるが(R. de Bagle des Hermens, 1981), それらは“発達したオルドヴァイ文化 Developed Oldowan”に含まれる可能性もあって、今一つ明確ではない。しかし、オルドヴァイ文化は確実に東アフリカを中心として、アフリカ大陸全土にまで広がりをもちつつあったようである。

Ⅱ-4. カラーリ・インダストリー Karali

Industry と“発達したオルドヴァイ文化 Developed Oldowan”

トゥルカナ湖東岸地域では、オルドヴァイ文化の初期形態であった KBS インダストリーが、地域的な発展を遂げてカラーリ・インダストリーへと移行した姿がたどられている。カラーリ・インダストリーは、K-Ar 法で150万年から120万年前という測定値が与えられている(Brock & Isaac, 1974) KBS 地区のオコテ Okote 凝灰岩層群やイルレット地区における中部凝灰岩層群中に含まれた石器群である(Isaac, 1976, Isaac & Harris, 1978, 大参, 1979)。

このインダストリーの石器群を構成する器種には、削器・円盤形石器・打器・祖形両面加工石器・多面体石器があり(図4), 洪水堆積によって形成されたシルト面から石器が出土したFxJj 18 遺跡 IHS 地点では、3,267点の出土資料のうちの96.2%が碎片で、114点(3.5%)が石器であった。114点は、石核製削器21%, 剥片製削器17%, 打器2%, 祖形両面加工石器3%, 円盤形石器25%, 多

1・3・4・7：削器，2：粗形両面加工石器，5：多面体石器，6：円盤形石器

図4 カラーリ・インダストリー石器カタログ (Harris & Herbich, 1978; Isaac & Harris, 1978 による)

面体石器21%, その他6%, 加工痕の認められる石核5%に分類される。IHS 地点では、打器が2%と極端に少なくなっているが、FxJj 20 遺跡E 地点では33%, 同 AB 地点でも16%ほどを占めていて、打器は依然として減少傾向にはないことを示している。KBS インダストリーと同じように、打器・円盤形石器・多面体石器といった石核石器を主要器種としている点が、カラーリ・インダストリーの特徴の一つでもある。

カラーリ・インダストリーの石器群のもう一つの特徴に、削器類の大形化と精製化がある。ほんの少量しかみられなかった KBS インダストリーの削器類と比べると、増加・大形化の傾向を示し、石核製削器の出現率が高くなっている。まず円礫を半分に打割し、続いて礫面を中央部分に残している背面の周縁に急角度の二次調整を加えて刃部を作り上げていく手順をみせている。剥片製削器では、厚手で縦長の剥片の周縁に刃部が付けられていて、定形化への動きはより明確となっている。第3には、オールドヴァイ文化にもみられた祖型の両面加工石器が出現している点に注意したい。剥離は円礫両面の全周に及び始め、ハンドアックスほど先端部の尖頭化が進んではいないが、移行的形式を示している。

カラーリ・インダストリーの石器群は、削器類の定型分化の点で特色をみせているとはいうものの、全体的にみて、“発達したオールドヴァイ文化”に対応させて捉えることができる。遺物包含層の年代値もオールドヴァイ遺跡ベッドⅡ中・上部と近似し、トゥルカナ湖東岸地域におけるオールドヴァイ文化の地域的发展形態として理解されている。

一方、先に示した“発達したオールドヴァイ文化”の石器群は、オールドヴァイ遺跡ベッドⅡ中部において、後述のアシュール文化 Acheulian と併存する形で姿を現し始める(Leakey, 1971)。オールドヴァイ文化の系譜に連なるこの文化の石器は、同遺跡の HWK 東地点2～5層、FLK 北地点、TK 地点居住面などから検出されているが、M. D. リーキーは、ハンドアックスなどの両面加工石器の出現を基準に、これを含まない場合を“発達したオールドヴァイ文化A”、含む場合を“発達したオ

ルドヴァイ文化B”と細分している。前者には HWK 東地点2～5層、FLK 北地点があり、後者には BK 地点や TK 地点上・下層居住面、MKK 地点居住面が該当している。次に、石器群の器種構成をみると、“発達したオールドヴァイ文化A”は、打器・祖形両面加工石器・多面体石器・円盤形石器・球形及び亜球形石器・打撃修形を受けた石塊、大小各種の削器・彫器・石錐awl・その他から成り、同文化Bでは、祖形両面加工石器に代ってハンドアックスやピック pick などの両面加工石器が加わってくる。また、側縁に二次調整が施された剥片や先端と基部に細かい調整が加えられた石片 *outils écaillés* も後者の新要素となっている。器種構成比をもう少し詳細に示しておこう。HWK 東地点3～5層では打器26.9%, 祖形両面加工石器2.6%, 多面体石器5.0%, 円盤形石器1.8%, 球形及び亜球形石器22.9%, 打撃修形を受けた石塊17.9%, 大形削器3.2%, 小形削器9.6%, 石錐2.8%, 側縁に二次調整の施された剥片0.6%, その他6.6%であり、同文化Bに分類されている TK 地点上層居住面では、打器9.9%, ハンドアックス等8.2%, 多面体石器1.0%, 円盤形石器3.1%, 球形・亜球形石器26.0%, 打撃修形を受けた石塊12.0%, 大形削器4.8%, 小形削器26.4%, 彫器25%, 石錐5.1%, 側縁二次調整剥片1.0%となっている。

このようにみえてくると、“発達したオールドヴァイ文化A・B”は、基本的にはオールドヴァイ文化の延長線上にあるといえそうで、祖形両面加工石器をハンドアックスやピック製作の発展過程においてみると、単純にA→Bへの移行変化を想定することができる。しかし、この点については、アシュール文化との併存問題も含めて、検討を要する課題となっている。

また、オールドヴァイ文化石器群と比較した場合、打器・多面体石器・円盤形石器の占める比率が低くなり、その一方で小形削器が増加している点を、最も顕著な相違点として指摘できる。そして、同文化A・Bを問わずどの地点においても、球形・亜球形石器が常に20～30%を占めているのは、石の投てきによる動物狩猟法が一般化しつつあった

ことを示していると考えてよい。

このように、オールドヴァイ遺跡における“発達したオールドヴァイ文化”石器群の内容をみると、カラーリ・インダストリーとの相違点がかなり大きいことに気付く。第1に、カラーリ・インダストリーには球形石器・亜球形石器が全く存在してはいなかった。このことは狩猟形態の違いを窺わせる。第2点としては、カラーリ・インダストリーにみられた、裏面が平坦で背面周縁に急角度の刃部がつく特徴的な剥片削器が、“発達したオールドヴァイ文化”の石器群には含まれていない点があげられる。これらのことは、旧石器文化展開の中で、相対的に共通する枠組みが形成されながらも、地域的に様相をわずかに異にしたいくつかのインダストリーが各地に分布していたことを示唆しているようでもある。

Ⅱ－5. 初期旧石器時代人の生活と環境

初期旧石器時代人が、水の確保のために川や湖の近くに住んでいたことは、以上に述べてきた最も古い時代の石器類のほとんどが、湖成堆積物あるいは川の氾濫によるとみられる粘土層やシルト層中から出土している点からも推測される。ここでは、再びコービ・フォーラ遺跡とオールドヴァイ遺跡の検出例に基づいて、当時の人々の生活を概括してみることにする。

イサークやハリスらは、コービ・フォーラのKBS遺跡とHAS遺跡の立地概念図を堆積地層と周辺地形とに基づいて作成している(Isaac, Harris & Crader, 1976; Harris & Herbich, 1978)。それによれば、北東部の丘陵高地から流れてきた川は氾濫原のデルタ地形を形成しながら、いくつかの支流に分岐して湖(トゥルカナ湖)へと注いでいき、両遺跡は、湖岸からやや内陸に入った、まわりに疎開林が広がる河辺林内に立地していたであろうとされている。川筋の河辺林内での居住は、飲料水の確保を第一の要件とした当時の人々にとって、最適であったと思われる。

そしてさらに、ハリスとヘルビッチによると、カラーリ・インダストリーに属する遺跡の地理学的な立地は、次の3類型に区分される(Harris

& Herbich, 1978)。第1の類型は湖岸線に接する河岸や氾濫原上に位置する遺跡であり、第2の類型は湖岸線から15～25kmほど内陸部に入った平野部の河岸や氾濫原に立地する遺跡。そして第3類型は、盆地の縁に沿った低い丘陵の麓に広がる扇状地上に所在する遺跡。この類型にしたがえば、KBS遺跡・HAS遺跡ともに第2類型に分類でき、堅果や漿果などの植物性食料を供給する河辺林が生え、動物達が集まり易い川の中流域は、最も生活に適していた場所であったといえそうである。

オールドヴァイ遺跡からは、ベッドⅠとベッドⅡ下部において、日本の縄文時代の敷石住居跡に似た円形礫群がいくつか検出されている(M. D. Leakey, 1971)。DKⅠ地点では、周辺にも同程度の礫の散布が認められるとはいえ、径10～20cm程度の礫が径4～5mの範囲に密集していて、明らかに人為的な石積みであることを示している。しかも、その周辺から動物骨の散乱も認められている。上部構造についてはよくわかってはいないが、この円形礫群は居住施設の一つであり、シェルターの役割を果たすものであったと考えられている。そして、散乱する動物骨がこの居住施設へと運び込まれて食料とされた獲物であったことは疑いえない。

ベッドⅠ上部のFLK北地点第6層からは、一体のゾウの骨と多数の石器類が発見されている。ゾウの骨は、牙と頭骨を除くほとんどが遺存していて、少量ながら別の頭とみられるゾウの骨も含まれていた。伴出石器は、打器・円盤形石器・剥片類・ハンマーストーン・石片・台石 anvil・搬入石に分類され、それらはゾウの骨をとり巻くような状態で分布している。打器・円盤形石器のような大形石器よりも、剥片類の方が多い結果となっている。これらの石器の出土状態からみて、この地点でゾウが解体されたことは間違いのない事実といえようが、人々がたまたま死んだゾウに出くわしたのか、それとも狩猟によって湿地へと追い込んで殺したのかは明らかではない。しかし、留意したいのは、搬入石や台石、ハンマーストーン、多数の石片が周辺から出土している点である。これらは、石器製作に関連する道具や石片である。

図5 KBS遺跡のグリッド別遺物分布図 (Isaac, Harris & Crader, 1976 による)

したがって、それらの道具は、この場所で同時に石器製作が行われていたことを暗示するものであり、初期旧石器時代人は、獲物を目の前にして緊急に解体用道具を作っていたことにもなる。

類似した事例が、FLK北地点の第Ⅱ層下部においても得られている。第Ⅱ層基底面より7フィートほど上位にある粘土層中から、一頭の絶滅したゾウの一種 *Deinotherium* の骨と39点の石器が出土し、足が粘土層の下の方から検出された点からして、ゾウは湿地中に沈み込んだ結果死んだものと想定されている。39点の石器は、打器2点、

多面体石器1点、円盤形石器1点、大形削器2点、球形石器1点、台石1点、ハンマーストーン2点、使用痕のついた石塊6点、石片7点、搬入石16点に分類されるが、やはりここでも、台石やハンマーストーン・搬入石・石片のような石器製作用道具類を伴出している点に注意される。

このような両FLK北地点の調査結果は、初期旧石器時代人が、集団で大形動物を湿地中に追込み、石塊や球形石器を使用して撲殺したのち、鋭利な刃部をもつ打器や円盤形石器、削器を用いて動物解体を行い、そして居住地へと運んでいく

という、一連の狩猟活動の姿を示しているのである。オールドヴァイ遺跡で発見される動物骨では、個人でも捕えられる小動物や魚の骨の方が多い。しかし、上記の例が物語っているように、初期人類がオールドヴァイ文化の最も古い段階から、集団猟によって獲物を捕まえていたことを知りうるわけである。

これに対して、採集活動や植物食を示す直接的資料は何一つ得られてはいない。しかし、クラークは、以上に述べてきた石器類が、植物採集にも併せて用いられていたであろうことを推察している (J. D. Clark, 1970)。例えば、多面体石器や他の大形石器類は動物の骨をつぶしたり、固い肉類を処理するのに用いられたのみでなく、堅果を割ったり、繊維質の植物をつぶしたりするのに使用され、打器もノコギリのように使うことによって、地下茎や地中に住んでいる小動物を掘り出すために使う木の棒を尖らせるのに用いられた可能性があるとして述べている。これは、こんにちにまで残った狩猟・採集民の生活のうちの60~80%が、採集活動によって得た植物食に頼っていることから解釈したものでもある。

Ⅱ-6. 遺跡の類型区分

初期旧石器時代人が、湖岸や河岸に近い地点に居住地を構えていたことは、既述のとおり地理的立地から明らかにされてきたのであるが、遺跡の性格も地点によってやや異なっていることがわかってきた。オールドヴァイ遺跡の類型区分 (Leakey, 1971) と同じように、コービ・フォラの KBS インダストリーとカラーリ・インダストリーに属する遺跡も、人工遺物と人々が食料にした動物の骨の分布の在り方から、次の4つの類型に区分される (Isaac & Harris, 1978)。

- A. 人工遺物は集中的に分布しているが、動物骨はわずかししか認められない遺跡。
- B. 一体の大形動物骨と少量の人工遺物が出土する遺跡。
- C. 数種類の動物の破碎された骨片と多量の人工遺物が出土する遺跡。
- D. 人工遺物の分布集中度が低く、散漫な広が

りをみせている遺跡。

この類型区分にしたがって、コービ・フォラ累層中に点在する各遺跡を分類してみると、8遺跡がA類型、1遺跡がB類型、5遺跡がC類型、その他の多くがD類型に区分され、石器類のみがまばらに出土する遺跡が最も多い。4類型のうちに、C類型が最も一般的な居住遺跡に当たっており、KBS 遺跡 FxJj 1 地点や円形礫群が検出されたオールドヴァイ遺跡 DK 1 地点はこの典型例であるといつてよい。これは、一定期間の居住が続けられたホームベース Home Base Site であったとみられる。B類型の遺跡は、動物の解体が行われた場所、すなわち、いわゆるブッチャリー・サイト Butchery Site あるいはキル・サイト Kill Site と呼ばれる遺跡であり、HAS 遺跡 FxJj 3 地点、オールドヴァイ遺跡 FLK 北地点の第6層遺構、同地点のベッドⅡ下部でゾウの化石骨を出土した遺構などがこれに当たっている。また、A類型の遺跡は、石器の製作を行っていた場所 Factory Site と呼ばれる遺跡、ないしは動物性食料よりも植物性食料に依存する割合が高かった居住遺跡又はキャンプ遺跡 Camp Site に分類できるかも知れない。そして、D類型の遺跡のように動物の骨はみあたらず、人工遺物が散漫に発見される遺跡も石器製作跡あるいは一時的なキャンプ地、短期間の居住地であったと考えられる。ただし、キャンプ遺跡は時間的なものなのか、季節的なものなのかは判断できない。リーキーは、この他にも旧河道の堆積層から遺物が発見される遺跡を別分類している (Leakey, 1971) が、これは二つの性格をもっている。一つはキャンプ地そのものを示している場合であり、第2には、原位置を留めてはおらず、本来河岸の自然堤防上にあったものが流れ込んだ結果A~D類型的遺跡となってしまった場合である。後者のような二次堆積の遺跡は実際にはいくつか検出されていて、シュングラ文化相に属するオモ川流域204地点遺跡 FtJi 1 地点の遺物群もこれに該当している。

これらの類型別遺跡は、初期旧石器時代人の狩猟・採集生活における機能的な活動形態を反映したものであると思われる。つまり、C類型の居住

遺跡に生活の拠点を置き、狩猟あるいは採集に出かけた途中でAまたはD類型のようなキャンプ地的な遺跡を残し、さらにゾウやカバなどの大形動物を捕えた場合には、B類型のような遺跡が形成されたのではないかと想像される。そして、通常はホーム・ベースやその近くで、一連の獲物捕獲行為を頭に浮かべながら事前に道具製作を行ったため、AあるいはD類型のような遺跡が残されたのであったが、まれには、大形獣の骨と原石や台石・ハンマーストーン・石片の散布が認められたオルドヴァイ遺跡 FLK 北地点の場合のように、集団で大形獣の捕獲を行いながら、持参した削器などの刃が折れたり鈍くなったりすると、その場で即座に石器製作を行って、解体行動を続行するようなこともあったらしい。したがって、石器の形態の器種区分が明瞭で、しかも各遺跡に活動の機能的類型が認められたオルドヴァイ文化の段階には、すでにある程度の系統的な活動体系が出来あがっていたものと考えられるのである。

Ⅲ. 石器製作技術の発達と人類の拡散

Ⅲ-1. アシュール文化の成立と広がり

北フランスのソンム河谷にあるサン・タンシュール Saint Acheul 遺跡を指標遺跡とするアシュール文化の成立は、前期旧石器文化展開の中で、一つの画期をなすものであった。とくに空間的分布の飛躍的增加には目を見はるものがあった。

J. G. D. クラークのいう第2様式に分類された整美なハンドアックスとクリーバーとを主要な器種とするアシュール文化の石器群は、おおよそ150万年前に出現し、10万年前以降まで存続したとされており、驚くべき長期にわたって維持された石器様式である。空間的・時間的に概ね斉一性を保持したアシュール文化は、アフリカ大陸で生まれ、全体に広がると共に遺跡数も増加し、さらにはヨーロッパや西アジア・インドあたりにまで分布域を広げていった。このことは、人類の多様な環境条件への適応と人口の増加を示すものである。しかし、アシュール文化が全体的に斉一性を保持したとはいうものの、実際には長期にわたる時間と

広範囲に及ぶ空間の中では、いくつかの地域的な差異と多様性とは認められており、このため、アシュール文化を技術的類似性をもった技術複合 techno-complex として理解しておいた方がよいとする考え方もある (Phillipson, 1985)。

アシュール文化の石器群の発達過程が層位的にたどられるのは、オルドヴァイ遺跡のみである。ここでは、アシュール文化はベッドⅡ中部において、“発達したオルドヴァイ文化”と併存する形で現われている (Leakey, 1971)。既に述べたように“発達したオルドヴァイ文化”は、文字通りオルドヴァイ文化の石器群器種構成に似た器種を基本的枠組みとしてもつもので、恐らくは50万年間にちかいアシュール文化との併存関係のあったことが推定されている。これを同一時代に同一場所で生存していた別種のヒトの道具であるとする考え方もある (Isaac, 1982) が、いっぽう、“発達したオルドヴァイ文化”をアシュール文化のうちに含めて、同一のアシュール文化技術複合の異なる様相を示したものと解釈する見方もある (Phillipson, 1985)。

オルドヴァイ遺跡のアシュール文化は、ベッドⅡで1～5期、ベッドⅢで6期、ベッドⅣで7～9期と、計9段階の発達過程がたどられており、4・5期を過渡期として、大きく前期と後期に区分されている。大形石器の二次調整剥離が細かくなっていく点からみて、後期になると、石のハンマーストーンによる直接打法が台石技法 anvil technique に加えて、仕上げ用に木や骨のようなハンマーを使用した円筒槌打法 Cylindrical hammer technique も出現していたと考えられている。

前期アシュール文化を最もよく示しているのが EF-HR 地点の石器群である。ここでは、石器類は主として粘土層の上位から出土し、その器種構成比は、打器15.4%、両面加工石器（ハンドアックスとクリーバー・ピック）53.8%、多面体石器5.5%、円盤形石器8.8%、球形及び亜球形石器9.9%、大形削器・小形削器ともに3.3%となっている。このほかに、ハンマーストーンや多数の剥片・石片類がある。両面加工石器として一括されたハンドアックス・クリーバー・ピックが全体

1 : ハンドアックス, 2 : クリーバー, 3・4 : 削器, 5 : 石錐, 6 : 球形石器
 図6 カランボ・フォールズ遺跡のアシュール文化期石器カタログ (J. D. Clark, 1970 による)

の50%以上を占めているのに対して、彫器や石錐、細かい調整の加えられた石片などは全く姿を消している。また、“発達したオルドヴァイ文化”において、どの地点でも10~20%を占めていた小形削器は、わずかに3.3%と非常に低い数値となっている。剥片の多くは、両面加工石器製作に伴って産出されたものとみられている。

ハンドアックスは、先端が尖り基部が平坦な形態のもの、両端が尖る形態のもの、両面に礫面を残すものなど、形態と調整程度において、様々な変異をもっているが、刃部が全周につけられている点では全て共通している。オルドヴァイ文化石器群の最主要器種であった打器において、刃部が円礫の先端あるいは側縁の一部に2~3枚の剥片剥取を行うことによって作られていた点と比べてみると、刃部の延長は数倍にも達している。ただし、この段階では、各1枚の調整剥離痕は巾広で大きいのが特徴となっている。EF-HR 地点のハンドアックスの大部分は剥片から作られており、母岩又は大形礫からまず大形剥片を取り出して、次に巾広の調整剥離を全側縁に加えることによって刃部を作り上げていく手順を示している。ハンドアックスは“握槌”とも訳される場合があるが、全周に及んだ刃部は、切る・敲く・つぶす・掘る・つつく・削るなどの多様な行為に適していたとされており、その意味でいえば、狩猟・採集活動において必要とされる道具が、いわば万能的な機能をかね備えた一つの道具概念に凝縮された姿のようなものである。だからこそ、この“便利な”ハンドアックスを主体とするアシュール文化は、想像を絶するほど長期間にわたって、広い地域で存在し続けたのであろう。このほかに、先端に直刃や斜刃をもつクリーバーや楕円形をしたピックもあるが、それらは石英脈岩や溶岩から作られ、また巾広で大きな調整剥離痕を残す点など、ハンドアックスの製作技法と共通している。

現在までのところ、M. D. リーキーは、オルドヴァイ遺跡におけるアシュール文化の出現は外来的と考えていて(M. D. Leakey, 1971)、オルドヴァイ文化の打器類からの発展過程とは捉えていない。この点に関しては、D. クラークも同意的な見

解を示しており(Clark, 1970)、さらに北アフリカ地域においても前代からの連続性は認められてはいない。

アシュール文化と“発達したオルドヴァイ文化”の同時期存在をめぐる問題については、先に一部紹介したが、リーキーは“発達したオルドヴァイ文化”に少量ながら含まれているハンドアックスが、形態・法量の上でアシュール文化のものといくつかの点で差異をもっている点を強調している(Leakey, 1971)。たとえば、平均法量($(\text{長さ} + \text{巾} + \text{厚さ}) \times 1 / 3$)が、EF-HR 地点のハンドアックスの場合は7~8cm、更に進んだベッドⅣ中のTKⅣ Fish Gully 地点出土の場合は9~10cmをピークにはほぼ正規分布を見せているのに対して、“発達したオルドヴァイ文化”に属するSHK・BK 両地点のハンドアックスは2~10cmまでの間にバラついた分布を示している。長さとの巾の比についても、EF-HR 地点では巾は長さの60%、TKⅣ Fish Gully 地点では50%付近を中心に正規分布をみせ、一方、SHK・BK 両地点では50~90%までの間で散慢な分布をみせている。同じように長さとの厚さの比についても、前2者では厚さは長さの25~30%を中心にした分布をみせているのに対して、後2者では30~55%までの範囲で不正規分布を示している。これらの点は、ハンドアックス製作の規格性において、アシュール文化の場合の方がはるかに高い水準にあったことを意味している。しかし、1点のハンドアックスにおける調整剥離痕の数は、EF-HR 地点では平均9.7個、SHK 地点で18個、BK 地点で16.5個となっていて、かえって、“発達したオルドヴァイ文化”のハンドアックスの方が入念に作られているような数値となっている。

こうして、リーキーはイサークと同じように、オルドヴァイ文化の系譜をひく“発達したオルドヴァイ文化”はホモ・ハビリスに、またアシュール文化はホモ・エレクトゥスに結びつけうるという考え方を暗示している(Leakey, 1971)。しかし、同一遺跡内に長期にわたって、異なる系統のヒトが並存していたとみる考え方には無理があり、また、ハンドアックスの規格や形態に差異が認めら

れうるとはいうものの、両者の器種構成の全体的
枠組は同一の範疇に含めうること、調整剥離痕数
が逆に“発達したオールドヴァイ文化”において高
い数字を示していることなどの諸点を考え合わせ
てみると、やはり、両者をアシュール文化の技術
複合の中に含めて捉えた方がいいように思われる。
そして、微妙に異なる環境や生態系への適応の仕
方の相違、石器使用集団間の個体差などが、石器
群の違いとなって現われてきているものと考えて

おきたい。

Ⅲ－2. 深化するアシュール文化の石器製作技 術

アシュール文化のより発達した姿、後期アシュ
ール文化の典型例がケニアのオロルゲサイリエ
Olorgesailie 遺跡から窺われるので、次にそれを
紹介しておこう。

オロルゲサイリエ遺跡では、居住面や石器群を

図7 オールドヴァイ文化、アシュール文化期遺跡分布図 (J. D. Clark, 1970) による

包含しているオロルゲサイリエ累層 Olorgesailie Formation 中のパミスに、K-Ar 法によって42.5 ± 0.9 万年前という年代値が与えられているが、石器文化が存続し、人々がこの地に生活していたのはこの年代値を挟んだ70万年前から6万年前ごろまでとされている(Isaac, 1977)。居住面が検出された地点は、湖に溶岩の尾根が岬のように突き出た地域、又は季節的に湖へと注いでいく川の砂層中であつた。小川の砂地の上はキャンプをするのに適していたようで、同じ集団がくり返し占地したとみられ、溶岩の尾根地形への居住は、湖の水面が上昇した場合に行われたものと想定されている。似たような地形での居住形態は、オールドヴァイ遺跡ベッドⅡ上層やタンザニアのイシミラ Isimila 遺跡、ザンビアのカランボ・フォールズ Kalambo Falls 遺跡でも確かめられている。したがって、このような湖岸に近い川辺での居住は、KBS遺跡やHAS 遺跡・オールドヴァイ遺跡以来、基本的に変えることはなかったとみられる。

オロルゲサイリエ遺跡における石器の器種構成は、ハンドアックス・ピック型ハンドアックス・ノミ型ハンドアックス・クリーバー・ナイフ・ピック・三面体石器 trièdre・打器・石核削器 core scraper・大形剥片製削器・各種の小形削器・ハンマーストーン・石核・剥片・搬入石・碎片からなっている。立地と同じように、器種構成の上でも、オールドヴァイ遺跡 EF-HR 地点の場合とさほど違いはみられない。しかし、大形石器がハンドアックスを中核として作られ、ハンドアックスとクリーバーが全体の80%を占めていることは特徴的である(図8)。小形石器では、削器・搔器類が圧倒的に多い。そして、大形石器の92%が両面加工されているのに対し、小形石器の93.1%は片面加工のみで終わっていること、また前者の平均長は16 cm、後者は4 cm というデータも出されている。

大形石器と小形石器については、さらに次の2点において若干の相違点をみせている。第1は、石材選択の点である。小形石器の56%は粗面岩、28.5%は玄武岩で作られているが、大形石器では71%が粗面岩製である。石材の選択が石器の用途

と機能に基づいて、いっそう明確化したことを示すものである。第2は、大形石器が優越する地点と小形石器が優越する地点とは立地がやや異なっている点である。大形石器の優越する地点は、川が流れている湖岸の氾濫原に限られているのに対して、小形石器の多い地点は、川とは無関係の湖岸域や氾濫原から見つかる場合が多い。両者に時期差も認められてはならず、相違の意味については必ずしも明確にはされていないが、アシュール文化と“発達したオールドヴァイ文化”の併存のように、機能の上から、大形石器の優越する地点は居住地、小形石器の比率の高い地点は、むしろキル・サイトやキャンプ・サイトのような一時的な占地場所であつたと解しうのではないだろうか。

上述の石器類は、大きな刃部をもつ石器(ハンドアックス・クリーバー・ナイフ)、重量のある大形石器(打器・ピック・石核削器)、小形石器(主として剥片製削器)の3つのカテゴリーに大きく分類されているが、このことは機能に基づいた形態区分がより明確になっていたであろうことを示すものである。イサークによると、鋭い刃・頑丈な刃・皮剥ぎ用の刃の3要素を備えあわせた大形の刃部をもつ石器は、しばしば非常に精巧に作られているので、剥片類と同じように動物の解体や皮剥ぎにも使用されていたとみられている(Isaac, 1977)。しかし残念ながら、ハンドアックスなどの両面加工石器が優越する地点では、比較的骨の出土が少ないという結果が出ている。また、打器のような大形で重量のある石器は、たたき切ったり、割ったりするのに用いられ、削器を中心とする小形石器は、木製品の皮削りや溝掘り、穴あけ、動物の皮の穴あけなどに用いられたと考えられている。このほかに、100 g ~ 7 kg までの大小の礫が居住面から大量に出土しているが、それらは石器製作用のハンマーストーン・台石、植物調理用、動物骨を割るための敲き石、シェルターの基礎、狩猟用の投石など多岐にわたって使用されたものとみられている。

ハンドアックスの形態は、後期アシュール文化期に移るに従って整美されていくが、例えばオロ

図8 オロルゲサイリエ遺跡の大形石器カテゴリー(上)とその出現頻度(下) (Isaac, 1977 による)

図9 アシュール文化期のハンドアックスにおける長さと巾／長さ比の関係 (Isaac, 1977 による)

1. カリアンドゥシー	13. イシミラ H20 地点	25. ロチャード
2. カランボ A 6 地点	14. " L19 "	26. モンターギュ L 3 地点
3. " B "	15. ケイブ・オブ・ハース	27. " L 5 "
4. " A5b "	16. ウォンダーブームプレート	28. ハングクリップ
5. " A 5 "	17. ブラウバンク第2地点	29. ナトロソ (ペニンジ)
6. " B 5 "	18. " 3 "	30. スリー・リバーズ
7. イシミラ J 12 "	19. ホームステッド	31. ウベイデア
8. " K14 "	20. プニール	32. テルニフィース
9. " H 9 "	21. カンティーン・コピイエ	33. アテリエ・コモント
10. " K 6 "	22. ラルセン	34. マ・アヤン・バルク
11. " H15 "	23. リバーヴェー	35. アンゴラ・サンゴ・ルベンバ
12. " K18 "	24. ニューマンズ・ポート	36. ヌソングジ

ルゲサイリエ遺跡の資料をオールドヴァイ遺跡 EF-HR 地点やペニンジ Peninj 遺跡出土例と比べてみると、調整剥離面の数がはるかに増加している。また、図9に示したように、オロルゲサイリエ遺跡のハンドアックスは、長さに比して薄手の形態をとる典型例となっていて、イシミラ遺跡や¹⁴C年代測定値で61,700±1,300年前の年代値が得られているカランボ・フォールズ遺跡の場合と比較的類似した統計値となっている。

後期アシュール文化期における集団の規模については、イシミラ遺跡とカランボ・フォールズ遺跡の居住面における遺物分布の在り方と、ブッシュマン社会の規模を根拠に、1エーカー当り100

±30人の人口規模が想定されている (Isaac, 1977)。しかし、オロルゲサイリエ遺跡も含めて、これらの遺跡では同一生活面での繰り返しの居住が行われていたとみられているので、実際には、集団規模はもっと小さかったとしなければならないのかも知れない。

この時代の狩猟と動物食の内容の一端は、オロルゲサイリエ遺跡から発見された動物骨から窺い知ることができる。第13地点からは、カバ、ゾウ、ウシ科動物、鳥、魚などの骨が19.2 kg 発見され、そのうちの90%以上は細かく砕かれた骨片であった。これを完全な骨に換算すると87 kg となり、さらに、肉に対する骨の割合を8%と仮定すると、

約1,000kgの肉量と計算でき、大量の肉がこの地点で食料とされていたことがわかる(Isaac, 1971)。第13地点からやや離れたシルト面でも一頭のカバの骨とハンドアックス、剥片類が出土している。これはキル・サイトであり、居住地、解体場所の区分を示すものとみられる。また、DE/89 B地点の居住面からは、絶滅したゲラダヒヒの一種 *Theropithecus oswaldi* の骨が出土している。おとなの骨44体、わかもの骨6~17体分はあり、オス・メスの比はほぼ同数とされている。DE/89 B地点では、未加工の礫も多く出土し、イサークはハッサの例を参考にしながら、季節的に出来る水たまりの近くに住んでいたバブーンを、投石等によって狩猟していたのではないかと仮定している。

このように、アシュール文化期を通じて狩猟と採集による生活形態が変ることはなかったが、道具製作の技術、環境への適応、狩猟の方法などの点で、より進歩した段階に移りつつあった。

おわりに

以上、定型化が未分化のシュングラ文化相の石器群からアシュール文化期まで、東アフリカにおける前期旧石器文化の動向を概説してきた。一つの遺跡の調査で得られた詳細な資料から、全体の時代像を理論化していく作業は不十分な段階にあるし、なによりも資料そのものの不足は否めない事実である。

道具を作り上げたヒトとその系統、アシュール文化石器群の成立、各石器群の系譜、狩猟・採集活動と石器の機能など、前期旧石器文化をめぐる問題点が多い。今後に残された課題である。

なお、本稿で用いた石器実測図は、原図に忠実に、筆者が浄書し直したものであることを断っておきたい。

文 献

- Brock, A. and Isaac, G. Ll., 1974. "Palaeomagnetic Stratigraphy and Chronology of Hominid-bearing Sediments, East of Lake Rudolf, Kenya." *Nature*, 247: 344-348.
- Chavaillon, J., 1976. "Evidence for the Technical Practices of Early Pleistocene Hominids Shungura Formation, Lower Omo Valley, Ethiopia." In Coppens, Y. et al. (eds.), *Earliest Man and Environments in the Lake Rudolf Basin*. University of Chicago Press, Chicago, 565-573.
- Clark, J. D., 1970. *The Prehistory of Africa*, Thames & Hudson, London.
- Clark, J. G. D., 1977. *World Prehistory in New Perspective*, Cambridge University Press, Cambridge.
- de Bayle des Hermens, R., 1981. "The Prehistory of Central Africa: Part I." In Ki-Zerd, J. (ed.), *General History of Africa, 1: Methodology and African Prehistory*, UNESCO, Heinemann, California, 530-550.
- Harris, J. W. K. and Herbich, I., 1987. "Aspects of early pleistocene hominid behaviour east of Lake Turkana, Kenya." In Bishop, W. W. (ed.): *Geological Background to Fossil Man*, Scottish Academic Press, Bristol, 529-547.
- Hay, R. L., 1976. *Geology of the Olduvai Gorge: A study of sedimentation in a semi-arid basin*, University of California Press, Berkeley.
- Isaac, G. Ll., 1976. "Plio-Pleistocene Artifact Assemblage from East Rudolf, Kenya." In Coppens, Y. et al. (eds.): *Earliest Man and Environments in the Lake Rudolf Basin*. University of Chicago Press, Chicago, 552-564.
- Isaac, G. Ll., Harris, J. W. K. and Crader, D., 1976. "Archaeological Evidence from the Koobi Fora Formation." In Coppens, Y. et al. (eds.): *Earliest Man and Environments in the Lake Rudolf Basin*, University of Chicago Press, Chicago, 533-551.
- Isaac, G. Ll., 1977. *Olgorgesailie*, University of Chicago Press, Chicago.
- Isaac, G. Ll. and Harris, W. K., 1978. "Archaeology." In Leakey, M. G. and Leakey, R. E. (eds.): *Koobi Fora, Researches into Geology, Palaeontology, and Human Origins*, Oxford University Press, Oxford, 64-85.
- Isaac, G. Ll., 1982. "The earliest archaeological traces." In Clark, J. D.: *Cambridge History of Africa—1*, Cambridge University Press, Cambridge.
- 門村 浩, 1987. 「熱帯アフリカにおける晩氷期—完新世中期の環境変動」『アフリカ研究』30: 71-94
- Leakey, M. D., 1971. *Olduvai Gorge—Excavations in Beds, I & II, 1960-1963*, Cambridge University Press, Cambridge.
- Merrick, H. V. and Merrick, J. P. S., 1976. "Archaeological Occurrences of Earlier Pleistocene Age from the Shungura Formation." In Coppens, Y. et al. (eds.): *Earliest Man and Environments in Lake Rudolf Basin*, University of Chicago Press, Chicago, 574-584.
- Noten, F. Van, 1971. "Excavation at Nuuuama Cave." *Antiquity*, XLV, 177: 56-58.
- Noten, F. Van, 1977. "Excavation at Matupi Cave." *Antiquity*, LI, 201: 35-40.
- Noten, F. Van, 1981. "The Prehistory of Central Africa, Part II." In Ki-Zerbo, J. (ed.): *General History of Africa: Methodology and African Prehistory*. UNESCO,

Brock, A. and Isaac, G. Ll., 1974. "Palaeomagnetic Stratigraphy and Chronology of Hominid-bearing Sediments, East of Lake Rudolf, Kenya." *Nature*, 247:

Heinemann, California, 550-567.

大参義一, 1979. 「東アフリカの初期旧石器文化」

『生物科学』31(4): 190-197

Sutton, J. E. G., 1981. "The Prehistory of East Africa." In
Ki-Zerbo, J. (ed.): *General history of Africa 1:
Methodology and African Prehistory*. UNESCO,
Heinemann, California, 451-486.